

『うつほ物語』の和歌における表現の方法

—好忠・順歌との共通語彙を中心に—

内藤 英子

一 はじめに

平安中期の歌人である、曾禰好忠と源順には、定数歌「好忠百首」に答えた「順百首」があり、二人の親交がとて深かったことがわかる。一人は、「初期定数歌歌人」であるとともに、「河原院周辺歌人」でもあり、十世紀半ばころから和歌の表現に新たな新風を巻き起こしている。

本稿では、『うつほ物語』の主に和歌に数多くみられる好忠と順の歌との共通する語彙を中心に検討すること、二人の歌が『うつほ物語』の和歌表現に様々な形で影響を及ぼしていることを明らかにするとともに、二人の和歌表現を物語内に用いることの意義について考察したい。

二 あて宮求婚歌群の和歌表現

まず、祭の使卷にあるあて宮求婚歌群の和歌表現と、

好忠と順の歌との関係をみる。特に、この求婚歌群には、『うつほ物語』の中でも好忠と順の歌との共通語彙が集中してみられる。祭の使卷は、初夏の到来を示す賀茂祭から始まり、あて宮求婚歌群に続いている。

A (実忠) 奥山の古巢を出でて時鳥旅寝に年ぞあまた
経にける

B (あて宮) 夏ばかりうひ立ちすなる時鳥巢には帰ら
ぬ年はあらしな

C (兵部卿宮) ぬるみゆく板井の清水手に汲みてなほ
こそ頼め底は知らねど

D (あて宮) あだ人の言ふにつけてぞ夏衣薄き心も思
ひ知らるる

E (平中納言) いつともわびしきものを時鳥身をう
の花のいとど咲くかな

F (あて宮) かひもなき巢を頼めばや時鳥身をうの花
の咲くも見ゆらむ

(二〇四) (二〇五)

Bのあて宮歌は、Aの実忠歌が自身を時鳥に喩えていのをうけて、そのうち古巢である妻子のもとに帰るのだろうと切り返している。「時鳥」の雛鳥が初めて巢立つことを「うひ立ちす（うひ立つ）」と詠む歌は、『うつほ物語』以外に、『好忠集』『順百首』夏部にある次の順の歌が見出せるだけである。

時鳥うひ立つ山をさと知らば木の間は行きて聞くべきものを

従来の引歌の定義からすれば、順歌は、内容的にはB歌と重ならず引歌とは言えないが、それ以前に「時鳥」が「うひ立ちす」という用例が順歌以外にないことから、順歌が『うつほ物語』に影響していると言える。

次に、C歌の「ぬるみゆく板井の清水」という表現に着目したい。

①わが宿の板井の清水里遠み人し汲まねば水草生ひにけり〔古今六帖〕井／『古今集』神遊びの歌・初句「わが門の」／神楽歌・初句「わが門の」結局「水さびにけり」

②いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ〔古今集〕雑上

③わが宿の板井の水やぬるからん底の蛙も声すだくなり〔好忠集』『毎月集』二月はじめ

Cの兵部卿宮歌には、①の神楽歌に由来する『古今六帖』歌や、水のぬるさと人の心を詠んだ②歌、好忠の③歌の影響が考えられる。その中でも、好忠の③歌は、C歌と季節は春と夏で異なるが、「板井の水」「ぬるむ」「底」という共通した語が多い。好忠が発案した初期定数歌内では、「返し」という詠歌方法があり、「好忠百首」

に「順百首」が「返し」の歌として詠まれたように、言葉や詠みぶりは同じだが、内容的には全く異なる歌を詠む方法で、『うつほ物語』内にも、その詠歌方法が取り込まれている。また、①の神楽歌の「板井の清水」という歌材を和歌に取り込んで詠む趣向も、好忠歌と『うつほ物語』に共通している。

D歌に「夏衣薄き心」とあるが、「夏衣」や「蟬の羽」の「薄さ」を人の心の薄情さに結びつける詠み方には次のような用例がある。

④蟬の声聞けばかなしな夏衣薄くや人のならむと思へば〔古今集〕恋四「寛平御時后宮歌合の歌」友則

⑤蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむものにはあらぬ〔古今集〕誹諧歌・凡河内躬恒

⑥夏衣薄くや人の思ふらん我はあつれて過ぐす月日をはらぬ〔好忠集』『毎月集』四月下

⑦蟬の羽の薄ら衣になりにしを妹と寝る夜の間どほな

るかな
〔好忠集〕「毎月集」五月中

⑧夏衣薄くはいつも見ゆれども涙漏り添ふ頃にもある

かな
〔藤原の君・平中納言〕

⑨かへるとも君を恋ふべき衣を着れども夏は薄き袂
を
〔吹上上・仲頼〕

⑩夏蝉の羽に置く露の消えぬ間に合ふべき君を分かれ
てふかな
〔吹上上・時蔭〕

好忠は、『古今集』の伝統的な詠みぶりを受け継ぎながらも、新たな詠みぶりを模索し、『古今集』以前に成立した、寛平御時后宮歌合の④歌や、『古今集』で誹諧歌に分類された⑤の歌の詠みぶりを参考にして、⑥と⑦の歌を詠んでいる。「蝉の羽」からの連想で「夏衣」が詠まれるのは、漢詩文に由来する表現で、好忠歌と『うつほ物語』に多くの用例がみられる。つまり、好忠と同じ歌の詠みぶりが、『うつほ物語』の歌にも多くみられるのである。⑧と⑨と⑩の『うつほ物語』の例はともに初夏の衣更えの頃に「夏衣」の薄さを詠んでいる。⑨と⑩は涼との惜別の歌で、「夏衣」の薄さに薄情さを重ね、男の友情を恋心に置き換えて詠んでいる。⑩の「夏蝉の羽」は、薄い「夏衣」の喩えとして用いられている。

EとFの贈答歌は、共通して「身をうの花」に「憂し」を掛け、「卯の花」が咲いている景色を詠んでいるが、

そのように詠む歌は次の『順集』歌にしか見出せない。

数ならぬ身のうの花の咲きみだれものをぞ思ふ夏の
夕暮れ
〔順集〕「双六盤の歌」

「双六盤の歌」は、歌を双六盤の形に並べ図形として視覚に訴えたもので、ある個所の音が特定された歌の歌群で「遊戯歌」とされる。その中の順歌は、好忠歌のように身の沈淪を積極的に愁訴するのではなく、自己抑圧的に表しており、それが「数ならぬ」の歌の修辞にもみられる。『順集』における特殊な歌群での特異な詠みぶりが、身の沈淪ではなく恋の思いを詠んだ『うつほ物語』の歌に用いられている。

このように、祭の使卷にあるあて宮求婚歌群の和歌には、好忠と順の歌との共通語彙が集中してみられるのだが、順歌にしかみられない歌語や特異な詠みぶりであったり、好忠と順の間にみられた初期定数歌の「返し」の歌のような詠歌方法や、漢詩文に由来し『古今集』では正統と認められず「誹諧歌」に分類されるような詠み方が、『うつほ物語』の和歌には用いられている。

三 「露」「積もれる山」

「塵積もりて山となる」という喩えがある。『大智度論』（卷九四）に「譬如積微塵成山難可得移動。」とあるのが

古く、『白氏文集』にも「千里始足下高山起微塵」(卷二二「統座右銘」という表現があり、漢詩文に由来する表現である。『うつほ物語』には、この喩えが度々用いられているが、藤原の君卷には実忠とあて宮の次のような贈答歌がある。

例の宰相(実忠)、志賀に詣で給ひて、それよりかくなむ。「日ごろは山籠りしてなむ。

A 憂きことを思ひ入るとはなけれども深き山辺を
いくから見つらむ」

と聞こえたまへり。あて宮、

B いく返り数置く露の時に積もれる山に見え
ば頼まむ (九一〜九二)

(実忠)「山に賜はせたりしは、『すなはちこそ聞こえさせむ』と思ひ給へたりしか。塵の山はさのみやは」とて、

C 恨むれど嘆く数にも居ぬ塵や深きあたごの峰と
なるらむ (一〇〇)

D (実忠) 旅寝する身には涙もなからなむ常に浮きたる心地のみする…

E (あて宮) たびごとに空に立ち居る塵なれや露ばかりにも浮かぶなるかな (一〇七)

志賀寺に参詣し山籠りしている実忠からの贈答Aに対

するあて宮の返歌Bに「積もれる山」の表現がある。この歌は実忠の贈答Aと対応せず、実忠の返歌Cには「塵」とあり、「露」は「塵」の誤りではないかと諸注釈書では指摘されている。^(注7)中国の歴史書の『晋書』には、「塵露之微有增山海」(卷六四)という表現があり、微小な物でも増えれば「塵」は「山」に、「露」は「海」になるという喩えである。「塵積もりて山となる」の喩えは、実現はかなり困難だが全く不可能ではない場合に用いられ、あて宮B歌の朝ごとに置く玉のように見える「露」がまたたく間に積もって「山となる」ことは、実現不可能な喩えとして用いられている。

次に、「塵積もりて山となる」「涙が海となる」と詠まれた歌の用例をみたい。

① 積もりては山となるてふものなれどうくもあるかな
塵泥の身よ (『古今六帖』ちり)

② 塵積もり夜殿は山となりぬらし秋の夜をへて寝る人
をなみ (『好忠集』「毎月集」八月中)

③ 袖に落つる玉はいくらぞ塵すらだ積もれば山となる
といふものを (『好忠集』「順百首」恋十)

④ 君がため塵と砕くる魂や積もれば恋の山となるらむ
(菊の宴・兵部卿官)

⑤ うちへて落つる涙や袖の上に潮の満ち来る海とな

るらむ

(菊の宴・平中納言)

⑥わがくたく心の塵は雲となり落つる涙は海となるかな
(菊の宴・東宮)

⑦風雲の驚く亀の甲の上にいかなる塵か山と積もりし

(菊の宴・あて宮)

⑧塵積もる山も何せむ雲懸かることのほかなる宿をうれしむ
(楼の上下・尚侍)

「塵積もりて山となる」の用例は、『うつつ物語』以前の和歌(物語和歌含む)に全六例あり、『古今六帖』に一例(①)、好忠(②)、順(③)に各一例、『うつつ物語』に三例(④⑦⑧)となっている。④と⑤、⑥と⑦は「塵」と「涙」、「山」と「海」がそれぞれ対になっており、⑥と⑦は贈答歌である。和歌の世界では、「涙」は「露」に喩えられるので、これらの『うつつ物語』の用例には、『晋書』と同じ対がみられることになる。③の「順百首」歌は、恋の悲しみで袖に落ちる「玉」のような涙は、塵でさえ積もれば山のようになるのだから、どれほどたくさん山のように積もったであろうと詠んでいる。「塵すらだ」は「塵すらだに」の意味である。「涙」や「露」は和歌の修辭で「玉」に見立てられるが、その見立てどおりに「露」を「玉」にできたなら、山のように積もることができる。だが、それは不可能なことである。

この③歌の発想が、あて宮歌Bの詠まれた背景にあり、あて宮歌は、実現不可能な無理難題の提示となっている。実忠の返歌Cでは、それを「塵の山」に戻し、「山」を「あたこの峰」という具体的な高峰に比較して答えている。このように解釈すると、あて宮B歌は誤写を考える必要はなく、現在の本文のまま読むことができる。あて宮のB歌にみられたような実現不可能なことを仮定して詠む十首歌が、『古今六帖』第四の「雑の思」にみられる。

置く露をけたで玉とはなしつとも 人の心をいかが頼まん (九首め)

まず、紀友則が「女をはなれてよめる」の題で、上の句で不可能なことを提示して下の句「人の心をいかが頼まん」に続ける歌を十首連続して詠み、続いて、在原時春、紀貫之、凡河内躬恒の四人の歌人が仲間うちで同じように続けて十首ずつ詠んでいる。紀友則の九首めの上の句は、「露」を消さずに「玉」にできたとしてもという実現不可能な仮定となっており、③の順歌の「涙」を「玉」に見立ててその量を推測する詠法に通じるものがある。このような試みは、「河原院周辺歌人」たちの間でも行われていて、順が我が子の死に際して、『万葉集』の沙弥満誓の歌をまねて、「世の中を何にたとへん」という上

の句に続けて十首連続して世の無常を詠み、順と親交のあった大中臣能宣と、紀時文が同じように十首連続して詠んでいる。③の順歌と『うつほ物語』B歌は、『古今六帖』に見られた実現不可能な無理難題を提示して和歌を詠む遊戯的な詠法が取り込まれていることと、下の句に人の心の頼みがたさが詠まれている点で共通している。

四 「鳩鳥」の「鳴く」思い

「鳩鳥」は『万葉集』からみられる歌材であるが、『うつほ物語』以前の和歌(物語和歌含む)で、『古今六帖』(十例)、『万葉集』(八例)に次いで用例の多いが『うつほ物語』(四例)である。

A夕暮れに雨うち降りたる頃、中島に、水の溜りに、
鳩という鳥の、心すこく鳴きたるを聞き給ひて、侍
従(仲澄)、あて宮の御方におはして、かく聞こえ
給ふ。

池水に玉藻沈むは鳩鳥の思ひあまれる涙なり
けり (藤原の君・七八)

Bものの音などかき鳴らしつつ明くるほどに、鳩鳥の
ほのかに鳴く、藤侍従(仲忠)聞きて、箏の琴にか
くかき鳴らす。

我のみと思ひしものを鳩鳥のひとり浮かびて

音をも鳴くかな

とあるかなきかにかき鳴らす。あて宮、琴の御琴に、

鳩鳥の常に浮かべる心には音をだに高く鳴かず
もあらなむ (祭の使・二一六)

C並び居て遊びしものを鳩鳥の涙の池に一人行くかな

(菊の宴・三二九)

Aは春、仲澄の同母妹あて宮に対する思いが初めて描かれる場面で、「鳩鳥」は繁殖期に雌雄がともにいるので二人並ぶものを喩えることが多く、ここでは兄と妹が暗示されている。仲澄歌は、自らを「鳩鳥」によそえて、雨が降って水かさが増したのを鳩鳥が思いあまって泣いた(鳴いた)涙だと詠んでいる。Bは夏の終わり(六月十三日)に正頼邸で納涼の宴が行われた翌朝の明け方、雌雄離れないはずの鳩鳥が一羽で鳴いているのを聞いて、仲忠は自身の独り身の憂愁を詠み、あて宮は鳩鳥を仲忠に喩え、鳴き声ばかりが大げさで少しも誠意が感じられないと突き放している。Cは息子真砂子君の死を悲しむ嘆く実忠の北の方の歌に答えた娘袖君の歌である。「鳩鳥」は真砂子君を喩え、雌雄つがいの鳩鳥に姉と弟の二人をなぞらえている。『うつほ物語』では、鳩鳥を雌雄つがいで把握し、特にAとBの場面では鳩鳥の鳴き声に触発され、自分の憂愁の思いを重ねて歌を詠んでいる点

が共通しているが、鳩鳥の鳴くことが和歌に詠まれる例は少ない。

①…妹の命の吾をばも如何にせよとか鳩鳥の二人並び居語らひし心そむきて家離りいます

〔万葉集〕卷五「日本挽歌」山上憶良

②冬の池に住む鳩鳥の連れもなくそこにかよふと人知らすな

〔古今集〕恋三・躬恒

③春の池の玉藻に遊ぶ鳩鳥の脚のいとなき恋もするかな

〔後撰集〕春中・宮道高風

④朝氷とけにけらしな水の面にやどる鳩鳥ゆきき鳴くなり

〔順集〕「康保五年、女五男八親王の御屏風の歌 池に水鳥あり」

⑤勝間田の池の氷のとけしよりやすの浦とぞ鳩鳥も鳴く

〔好忠集〕「毎月集」正月中

⑥鳩鳥の氷の関に閉ぢられて玉藻の宿を離れやしぬらむ

〔好忠集〕「毎月集」十二月終はり／『拾遺集』雜秋

「鳩鳥」は『万葉集』では①のように、恋歌や妻の哀悼歌などで雌雄つがいのものとして詠まれることが多く、

②の『古今集』や③の『後撰集』になると、「底（あるいは「下」）に通ふ」を連想させる語として詠まれている。

④の順の屏風歌は、「鳩鳥」と氷が詠まれ、⑤や⑥

の好忠歌に影響を与えているが、「鳩鳥」が「鳴く」と和歌で詠まれているのは、『うつほ物語』以前の和歌では、『うつほ物語』の二例と④の順歌と⑤の好忠歌だけである。

④と⑤は強い影響関係にあり、⑤では「やすの浦」には、「安」と「野洲」が掛けられ、両歌とも「鳩鳥」が春になって解氷し、安心して池の水面に浮かべるので喜ぶ様子が鳴くことに表されている。『うつほ物語』のAとBの場面の歌も一羽で鳴く孤独な「鳩鳥」の鳴き声を契機にして詠まれており、「鳩鳥」の「鳴く」思いにまで想像をめぐらせ、和歌に詠んでいる点で、④の順歌や⑤の好忠歌と共通している。このように、『うつほ物語』には、『万葉集』からある歌材を用いながらも、その鳴き声に込められた思いまで想像して詠むという好忠や順の新しい詠法がみられる。

五 不遇表現としての「松の緑」と「数ならぬ身」

『うつほ物語』には衣袍の色に対するこだわりが感じられ、吹上^上下^下巻では、衣袍の色を詠み込んだ和歌が並んでいる。

A (季明) 童田姫紅葉の笠を縫ふことは一樹ある松を露に会へとぞ

B (種松) 佐保山の緑の蓑に隠れたる松の陰にも今は

たのまむ(正)

(一九三)

当時の衣袍の色は、五位が深緋、六位が深緑で七位は浅緑である。Aの「紅葉の笠」には五位に叙せられた種松が喩えられており、「一樹ある松」は從七位上相当の種松の元の役職が浅緑の衣袍であったことを暗示している。Bの「緑の蓑に隠れたる松」も五位になれずにいた種松を喩えている。衣袍の色で官位を表現するという詠歌方法は、『好忠集』に九首みられ、「河原院周辺歌人」詠にも散見する。

①松の葉の緑の袖は年ふとも色変はるべき我ならなくに

〔好忠集〕「杏冠歌」

②花咲く春もくれやすく、紅葉する秋もとどまらず、年経ぬる緑の袖の、しのびに落つる紅の涙にぞひちにけるを、春も秋も心憂しとあれば、：

〔好忠集〕「順百首」序

③住の江の松はいたづら老いぬれど 緑の衣脱ぎすてむ 春はいつともしら浪の：〔拾遺集〕雑下「身の沈みけることを嘆きて、勘解由判官にて」源順
④へにけむ袖の深緑色あせがたに今はなり かつ下葉より紅に移ろひはてん：

〔拾遺集〕雑下「返し」能宣

①②は「緑の袖」に六位の緑色の袍を喩えて身の不遇

を詠んだ歌で、②の順の歌では嘆きを示す「紅の涙」とともに詠まれ、「紅」には五位の衣袍の色が暗示されている。『拾遺集』の③④歌は、長歌の贈答になっており、③の「緑の衣」は卑官の不遇意識の表象で、④は「深緑」(六位)から「紅」(五位)に昇進する可能性が詠まれ、能宣が順を慰めている。特に『うつほ物語』と同じように、その「緑の袖(衣)」を「松の緑」とともに詠んでいるのは、終生六位のままで丹後掾以上には出世しなかった好忠の①歌と、賜姓源氏の末裔であり優れた教養を持ちながら、年老いるまで六位であった順の③歌にみられる。

松の緑に万年六位を喩える詠法とともに、身の不遇を表す「数知らぬ身」「数ならぬ身」という和歌表現が『うつほ物語』にはよく用いられている。

C(涼)「数知らぬ身よりあまれる思ひにはなぐさの浜のかひもなきかな：

(行政)数ならぬ身をはつ秋のわびしきは時雨も色に出でぬなりけり (祭の使・二三八〜二三九)

D(東宮)数ならぬ身は水の上の雪なれや涙の上にもれどかひなき (菊の宴・三一)

東宮をはじめ主だった求婚者にはみな「数ならぬ身」に類する表現が用いられ、不遇の嘆きが恋の嘆きに置き

換えられて詠まれている。「数ならぬ身」に類する表現の和歌での用例は、好忠、順、元輔、重之、兼澄らの「河原院周辺歌人」詠に多く、特に『好忠集』には五例みられ、「数ならぬ」は「好忠の自己認識として多用されている言葉^(注1)」である。

⑤…蓬のもとに閉ぢられて出でて仕ふることもなき、わが身ひとつは憂けれども：数ならぬ心ひとつをなぐさめんと、百千の歌をよみつづけ、あまたのことにいひ続けて…
〔好忠百首〕序

⑥住吉のならしの岡のたまつくり数ならぬ身は秋ぞ悲しき
〔毎月集〕九月上

⑦君恋ふる心は千々に砕くれど：数ならぬわが身なるらん
〔好忠百首〕恋十

⑧数ならぬ心を千々に砕きつつ人をしのばぬ時しなければ
〔查冠歌〕

⑨数ならで思ふ思ひの年経ともかひあるべくもあらずなりゆく
〔物名歌〕ひと

⑩数ならぬ身のうの花の咲きみだれものをぞ思ふ夏の夕暮れ
〔順集〕「双六盤の歌」

⑤から⑩には、世の中に認められない不遇な好忠の嘆きが詠まれている。二で前述した順の⑩にも「数ならぬ身」が詠み込まれている。

松の緑で六位の衣袍を表す表現や、「数ならぬ身」は不遇を嘆く表現ではあるが、『うつほ物語』では政治上での不遇の身を嘆く用例は少なく、恋の思いが成就しない、自分の思い通りにならないという恋の嘆きで用いられることがほとんどである。すなわち、好忠や順の和歌に示されていたような沈淪訴嘆の情が、恋愛感情に置き換えられて表現されている。

六 「初期定数歌」と『うつほ物語』の詠歌方法

『好忠集』の「順百首」は「好忠百首」に対して、「源順これをみて返ししたりとなむ」として詠まれ、初期定数歌群（「重之百首」「惠慶百首」も含む）は、「返し」という詠歌行為によって展開している。^(注2)

①鏡かと氷とちたる水底に深くなりゆく冬にもあるかな
〔好忠百首〕

②春立たば氷とけなん沼水の下恋しくも思ほゆるかな
〔順百首〕

③神祭る冬は半ばなりにけりあねこがねやにすがき
〔好忠百首〕

④神祭る榊はさすなりにけり夕月夜にも大幣に見じ
〔順百首〕

「好忠百首」と「順百首」には、①と②の歌や、③と

④の歌にみられるように、名詞を中心とした歌ことばの一致のみならず、「〜は〜になりけり」のような複合的な表現の一致がみられる。しかし、従来の引歌とは異なり、歌ことばは一致するものの、内容的には異なる歌が詠まれている。『うつほ物語』にもこのような「返し」の詠歌方法によって新たに異なる巻で詠まれた歌が散見している。

A あひも見ぬ日のながらふる袖よりは人の涙の落ちぬ
べきかな (嵯峨の院、宮あこ君)

よそにのみかくながらふる袖よりも人待つ滝の落ちぬ日ぞなき (あて宮、東宮)

B 年経ればまつは枯れつつ住吉は忘れ草こそ生ふと言ふなれ (嵯峨院巻、あて宮)

波越ゆるまつは枯れつつ住吉は忘れ草のみ生ふとこそ聞け (菊の宴、あて宮)

C わがごとや春の山辺も焦がるらむ嘆きの木の芽もえぬ日もなし (菊の宴、仲澄)

けぶりかと四方の山辺に霞みゆくいづれの木の芽もえぬなるらん (『好忠集』『毎月集』)

A は「ながらふる」の「ふる」に「振る」が掛けられ、「振る」と「袖」は縁語である。この二首は技法や発想、詠みぶりがかなり近い。B の二首も同様で初期定数歌に

おける「返し」の詠法と似ている。A、B は『うつほ物語』内の類似であったが、C のように『うつほ物語』と好忠の歌にも詠みぶりの似た歌がある。このように、「初期定数歌人」である好忠と順の間でみられた「返し」の詠法が『うつほ物語』にも取り入れられている。

七 『うつほ物語』と「河原院周辺歌人」詠との関わり

国譲上巻の兼雅とあて宮の手紙の贈答(付註)には、「河原院周辺歌人」詠との共通語彙である「尾張法師」を用いた喩えがみられる。

(兼雅)「尾張法師のやうなる喜びにはべれど、『聞こえさせでやは』とてなむ。」…

(あて宮)「いとかしこく、かくのたまはするをなむ。

ここには、時知らるる心地してはべり。」(六七五)

「尾張法師」は散逸物語の作中人物の名前で、その用例が見いだせるのは、次の①②の二例のみである。

①今は時知らぬ尾張法師の墨染めにやなしてましとぞ思ふや。 (『好忠集』『順百首』序)

② 川のほとりに子どもありて、法師紙かうぶりにて祓へする所

時知らぬ尾張法師の祓へをば頭つつめる紙のみや聞
く (『能宣集』屏風歌あるいは物語障子)

③梅津川 春の暮れにし あしたより…くる夏ごとに
あひくれど 時にしあはぬ子にしあれば 草葉を
つめることもなく 憂き身ひとつのつねなきを…

〔好忠集〕「毎月集」夏歌長歌序

①は「順百首」序で自らの歌を、順が謙遜して言った言葉で、「時知らぬ尾張法師」とは、時宜を得ぬ的外れな行為をして物笑いの対象になった法師の意味であろう。②の「法師紙かうぶりして蔽へする所」という詞書から、能宣が当時の屏風あるいは障子に描かれていた「尾張法師」の物語絵を見て、歌を詠んだことがわかる。

『うつほ物語』では、兼雅は、梨壺が男皇子を出産したことを、既にあて宮の皇子が二人誕生している中で、「尾張法師」のような時を逸した喜びであると手紙に記しているのに対し、あて宮は、「尾張法師」とは異なり逆に「時を知」って、時勢が自分の属する源氏から兼雅の藤原氏に移り、その権勢が強くなっていく心地がすると述べている。

「尾張法師」は、順と能宣の歌と、『うつほ物語』にしか見いだせない表現で、『うつほ物語』が「河原院周辺歌人」である①の「順百首」序あるいは②の能宣歌を引用している。また、③の好忠歌序にある「時にしあはぬ子」は、「時知らぬ尾張法師」と類似表現で、自分だ

けが時世にあわず、「憂き」思いを抱き無常を感じていることを意味している。「時知らぬ尾張法師」という表現は、恐らく「河原院周辺歌人」の仲間内だけに流行した表現で、不遇を嘆く沈淪歌人たち、具体的には、好忠、順ら「河原院周辺歌人」たちの自嘲表現としてとらえることができる。『うつほ物語』の表現は、「尾張法師」を物笑いの対象とした②の能宣歌よりも、「時知らぬ」や「時にしあはぬ」の語に重点が置かれ、時世にあわず世の中に認められない自らを、嘲笑気味に喩えた①の順や③の好忠の歌序を意識した表現となっている。

このように、好忠と順二人の和歌だけでなく、「河原院周辺歌人」詠にも対象を広げると、『うつほ物語』との共通語彙は格段に増える。例えば、あて宮巻に「青柳のいとま」とい表現がある。

青柳のいとま惜しとて鶯の雁の手向けもとぢずや
あるらむ (三六二)

正頼歌の「青柳のいとま」には「糸」と「暇」が掛けられ、鶯が雁への餞別に錦を織るいとまがないと嘆いている歌である。この修辞の用例は、『うつほ物語』以前に三例しかなく、いずれにしても「河原院周辺歌人」詠である。

④ 右兵衛督忠君の朝臣、新しく調ずる屏風の歌、

三月、人の家に女ども柳の本にあそぶ

枝しげみてにかけそめて青柳のいとまなくともくら

すけふかな 〔順集〕

⑤…風にかたよる青柳のいとまのひまもなきまで…

〔好忠集〕「毎月集」序

⑥…青柳のいとまのひまに、しらまゆみはるの山べに

行き… 〔惠慶集〕「河原院歌会序」

⑦ゆふだすき花に心かけたれば春は柳のいとまなみ

こそ 〔好忠集〕「毎月集」二月のはじめ

④の屏風歌の作成年次は、応和二（九六二）年一月七日から康保五（九六八）年六月十三日の間と考えられている。一方、⑤の『好忠集』の成立は、上限が安和元

（九六八）年十一月、下限が天禄三（九七二）年と考えられており、④の屏風歌の成立が早い。つまり、④の

『順集』にある屏風歌の表現を⑤の好忠歌が取り入れている。

「河原院」に深く関わった惠慶法師の⑥歌の詠歌時期は明らかではない。また、「青柳」でなく「柳」の

「いとま」であれば、『好忠集』に⑦の用例があり、好忠

には「いとま」を詠んだ歌が他にも二首ある。「青柳のいとま」は、「河原院歌人グループの周辺で一時的に流行をみた」^{〔16〕}表現であり、それを『うつほ物語』が正類の

歌に取り入れている。④の順歌と⑤と⑦の好忠歌、正類

の歌は、「いとま」がないことを和歌の主題としている

点で共通している。特に⑤と⑦の好忠歌は、不遇でつれ

づれなる「いとま」が実際はあるのに対し、特異な和歌

の修辞を用いて逆に「いとま」がないと詠むことで、遊

戯的でありながら、幾分自嘲的な詠みぶりになっている。

このように、和歌の贈答に引かれた「時知らぬ尾張法師」

という歌語や、物語内和歌に引かれた「青柳のいとま

」にみられる和歌の修辞は、「河原院周辺歌人」の間に流

行した表現である。だが、「河原院周辺歌人」詠の中で

も、『うつほ物語』と表現の類似が際立っているのは、

好忠と順の二人の歌となっている。

八 おわりに

『うつほ物語』の主に和歌にみられる好忠と順の歌との共通語彙の検討を通して、『うつほ物語』には、それ

以前に用例が少なく好忠や順の歌にしかみられない特異な歌ことばや和歌の修辞が多く、従来の引歌の定義には

おさまらない初期定数歌内の「返し」の詠法に似た詠み

ぶりもみられることが明らかとなった。特に、祭の使卷

はそれが顕著である。また、『古今集』以前に成立した

漢詩文に由来する和歌表現や、『万葉集』以来の歌語を

用いながらも音に着目する新たな詠みぶり、誹諧歌的な

遊戯歌、不遇表現など、好忠と順の和歌に共通する表現は、様々な形でみられる。

『うつほ物語』には、好忠と順の二人の歌だけでなく、二人を中心とする「河原院周辺歌人」詠と関わりのある表現も多い。彼らは、『古今集』の伝統を継承しながらも、新たな表現を試み、『万葉集』や『古今六帖』の古歌をはじめ、催馬楽・神楽歌などの歌謡、屏風歌にみられる歌ことばや歌材、漢詩文に由来する表現などを積極的に和歌に取り込み、和歌表現に新風を巻き起こした人々である。そうした表現と同じ傾向が『うつほ物語』にもみられ、好忠と順を中心とする「河原院周辺歌人」詠が積極的に物語表現に取り込まれ、新たな表現が和歌を中心に試みられている。二人の和歌表現は、当時の貴族社会の中で認められていたとは言い難く、それを作者無記名の物語和歌に用いることで、新しい詠みぶりを模索していたのだろう。また、「河原院」が物語生成の場に関与していた^{注1)}可能性も高い。

今後は、そうした「河原院周辺歌人」らの新風の表現を、積極的に物語内の和歌だけでなく地の文にも取り入れている『うつほ物語』全体の表現の方法が、その物語内容にどのように関わっているのかを解明していきたい。

注

(1) 「初期定数歌人」とは、「初期定数歌」の創始者で「好忠百首」を詠んだ曾禰好忠と、その返しの「順百首」を詠んだ源順、東宮の下命により「重之百首」を詠んだ源重之らをさしている。

(2) 「河原院周辺歌人」とは、安法法師を主人とする河原院に集った大中臣能宣、清原元輔、平兼盛、源重之、惠慶法師らの歌人たちを総称して用いている。彼らは、河原院を中心として交友関係を深め、その多くは、賜姓源氏や摂関の主流とはいえない貴族や出家者で、下位の沈淪の歌人たちであった。

(3) 先行研究としては、山本令子『宇津保物語』春日社頭和歌に関する一考察(『和歌文学研究』七二・一九九六年六月)があり、「春日詣」巻が、源順やその周辺に位置する人物の手に成った可能性を想起させる」と指摘されている。本稿では、『うつほ物語』の本文全体を考察の対象としている。

(4) 『曾禰好忠集』注解(二〇一二年、三弥井書店)には、好忠の③歌の注に、①の神楽歌の「同時代の受容例は他に『宇津保物語』の「ぬるみゆく板井の清水手に汲みてなほこそ頼め底は知らねど」(まつりのつかひ・二二八)

くらいしか見えない。この類似性は注目されよう。」とある。

- (5) 滋野貞主「鬢鬢迎枝蚬翼薄」(『経国集』卷十一「奉和鞞鞞篇」)、施榮秦「羅裙数十重猶輕一蟬翼」(『玉台新詠集』卷四「雜詩」)など。
- (6) 山口博「沈淪歌壇の性格 第一章源順論」(『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』一九六七年、桜楓社)。
- (7) 中野幸一「うつほ物語」新編日本古典文学全集の頭注、室城秀之「『うつほ物語』の和歌総合研究」(非売品、二〇〇〇年)など。原田芳起校注「宇津保物語」(角川文庫)では、底本「露」が「塵」に改められている。
- (8) 『北齊書』「每思塵露、微益山海」(卷四四)など、漢詩文には多くの用例がみられる。
- (9) 松本真奈美「曾禰好忠『毎月集』について―屏風歌受容を中心に―」(『国語と国文学』六八一・一九九一年九月)。
- (10) 第五句は底本では「今は」のあと四文字分欠字となっているが、角川文庫本により補った。
- (11) 『曾禰好忠集』注解(二〇一一年、三弥井書店)。
- (12) 近藤みゆき「古今風の継承と革新―初期定数歌論―」(『古今和歌集研究集成 第三卷』二〇〇四年、風間書房)。
- (13) 兼雅とあて宮の手紙は、いずれも同じ引歌表現を用いて

贈答歌的であり、和歌表現の一部ととらえる。

- (14) 山口博「大中臣能宣論」(『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』一九六七年、桜楓社)。
 - (15) 本論で取り上げた言葉以外にも、「夜寒」「佐保姫」「羽風」などがある。
 - (16) 西山秀人「源順歌の表現―好忠および河原院周辺歌人詠との関連―」(『和歌文学研究』六四・一九九二年一月)。
 - (17) 俊蔭巻の俊蔭邸の描写には、「河原院」が意識されており、「河原院」の荒れ果てた風景を詠む「河原院周辺歌人」詠と通うものがある。
- ※『うつほ物語』は、『うつほ物語 全』(おうふう)、『好忠集』は、『曾禰好忠集』注解(三弥井書店)、神楽歌は新編日本古典文学全集を本文とし、それ以外の歌については、『新編国歌大観』所収の本文によった。また、私に適宜表記を改めた箇所や、注記を施した箇所がある。
- ※本稿は、二〇一一年度名古屋大学国語国文学会秋季研究発表大会において口頭発表した原稿に基づいており、当日、御教示いただいた先生方に感謝致します。

(ないとう・えいこ)愛知淑徳高等学校